

国際委員会企画シンポジウム

近隣国と日本における健康の連続性

—Cross-cultural health psychology の示唆—

企画者	田中 共子 (岡山大学社会文化科学研究科)
司会者	田中 芳幸 (京都橘大学健康科学部)
話題提供者	高浜 愛 (一橋大学法学研究科)
話題提供者	金 外淑 (兵庫県立大学看護学部心理学系)
話題提供者	畠中 香織 (岡山大学社会文化科学研究科)
指定討論者	田中 共子 (岡山大学社会文化科学研究科)

企画趣旨

アジアの近隣諸国と日本は、その地理的な近さから密な関係があり、歴史的な接点や文化的ルーツの共有も少なくない。そうした我々の健康法や健康観、健康問題とその治療や予防の方法は、ある程度類似したものを持ちながらも、近年の社会的文脈下で独自の発展を遂げている。

健康に関する問題の発生と対応をめぐる、我々が共有できる視点や方法論があるならそれは何か。背景に健康文化の連続性という問いを抱えながら、比較文化健康心理学的な発想で、近隣国と日本のケースを具体的に考える機会を持ちたい。

アジア圏を視野に入れた健康心理学を考えていく場合、二つのアプローチが考えられる。一つには文化間の現象を比較することである。健康をめぐる地域間の異同の発見を通じて、健康問題の構造や発生機序の洞察を進められる。ユニバーサルとローカルに関する考察も深まるだろう。もう一つには、文化間の移行者や接触者において、発生した問題を分析することである。社会文化的文脈がいかに健康に影響するかを査定し、健康に関する対比的な文化の特徴付けや、文化の影響範囲を整理できる。集団の文化と個の特徴との関わりについても、省察が進むだろう。これらは我々の健康観や健康への関わり方、さらには対策に潜在する個性を理解する手がかりとなり、別の視点に気付かせてくれる。そこから、新たな発想による発展可能性の端緒が開かれることを期待したい。

今回取り上げる問いは、以下である。近隣国間での文化移行者は、その微妙に異なる環境の中で、どのような健康行動を成立させていくのか。健康法や治療法に浸潤する文化的な差異は、どのような課題を、治療者の側と治療を求める側にもたらすのか。自らが健康ケアの専門家であると同時に異文化滞在者でもある、異文化間ケアの当事者は、複合的な文化差に起因する問題をどのように表現し、周囲はそれをどう受け止めていくのか。

近隣国と日本のケースを手がかりに、具体的な問題の諸相をみていくことで、健康心理学におけるユニバーサルな面と文化特異的な面を認識することができる。そこから従来の主流であった、欧米の視点への合流のみならず、アジアの視点の生成を意識する方向へとつなげていきたい。

内容の概略に先立って、今回話題提供をしていただく方々を紹介させて頂く。

高浜愛氏は、日本の大学を卒業後、アメリカの大学院で教育を受けられ、自らも留学生として学んだ経験をお持ちである。現在は勤務先の大学において、外国人留学生および海外留学のアドバイジングを担当されている。専門は異文化間教育、異文化間コミュニケーションであり、留学生教育の最前線に立たれている。在日留学生の食の文化受容に焦点を当てて、ご報告いただく。

金外淑氏は、かつて留学生として来日され、現在は日本の大学で、心身医学や認知行動療法という専門分野をベースに、研究活動と心理臨床の実践に取り組んでおられる。今回は心理面接過程での初期段階で注目されている、患者の「感情表出の仕方」に焦点を当ててお話しいただく。健康に対する意識は高いが、自分の症状を訴えることが乏しい日本人と、それ以上に健康への関心が強く、病気の症状を訴える韓国人という特徴を手がかりに、心理職の立場からご報告いただく。

畠中香織氏は、日本の大学を卒業後、アメリカの大学で看護学を学び、かつアメリカの病院で看護師として勤務した経験を持っておられる。その後日本の大学院で看護学を再度学ばれ、現在は看護学校の教員および看護師として活躍されながら、大学院での研究を続けておられる。日本の高齢者施設などで働く、在日外国人看護師・介護士の職場における異文化適応をめぐる話題をご提供いただく。